訳者あとがき

従来、オランダ共和国の経済史的評価は低く、一時的で例外的な繁栄として扱われるのが関の山であったように思います。しばしば共和国は、産業革命に失敗した商業資本主義経済の典型として描かれました。たとえ黄金時代の栄華が語られても、イギリスの産業革命やフランスの大革命に追い立てられるかのように、瞬く間に歴史書の舞台から消えてしまう儚さは、経済史におけるオランダの立場を象徴しています。共和国期にヨーロッパ随一の繁栄を手にしつつも、一九世紀末まで工業化がみられないという独自の展開は、オランダ経済の「失敗」を印象づけ、イギリスになれなかった国という烙印をおされる羽目に陥りました。

一方で、従来の評価とは対照的に、共和国経済の成功を強調する立場も存在します。我が国では、オランダを「近代世界システム」における最初の「覇権国」とみなしたウォーラーステインの『近代世界システム』（一九七四年）がよく知られておりますし、D・C・ノースとR・P・トーマスも『西洋世界の勃興』（一九七三年）において、オランダが「マルサス的制限からのがれた西欧の最初の地域」であり、有利な立地と効率的な経済組織の確立によって「持続的な経済成長を達成した最初の国」（速水融・穐本洋哉訳）であったと高く評価しました。したがって、近世初期のオランダ経済に対する評価は、大きく分裂した状況にあるといえましょう。オランダ共和国とは、中世の最後を華々しく飾ったあだ花なのでしょうか。それとも近代の夜明けを告げる一筋の光だったのでしょうか。

碩学アド・ファン・デァ・ワウデ氏とヤン・ド・フリース氏による本書『最初の近代経済――オランダ経済の成功・失敗と持続力 一五〇〇～一八一五』は、最新の研究成果を総合した歴史教科書であると同時に、オランダ経済の大胆な再評価を提言した力作です（以下、敬称略）。彼らは、いずれもオランダ史学会を代表する第一級の研究者ですが、オランダが史上初の近代経済であったと宣言したことで、学会のみならず、社会的にも大きな反響を呼びました。先に出版されたオランダ語版（一九九五年）は、この種の学術書としては異例の三版を重ねましたし、「NRCハンデルスブラット」や「フォルクスクラント」などオランダの主要各紙にも取り上げられました。また、ファン・デァ・ワウデ自身の言によれば、一時、キヨスクの書籍

コーナーにまで並べられたとのことです。続いて九七年に、ド・フリースの手による英語版が出版されました。そして今回、ようやく日本語版が登場する時を迎えた次第です。

ここで著者について簡単に紹介しておきましょう。共同執筆者の一人であるアド・ファン・デァ・ワウデは、一九六〇年代からオランダの歴史学研究を先導した「ワーヘニンゲン学派」の一員です。「ワーヘニンゲン学派」とは、歴史家スリッヒャー・ファン・バートが五〇年代半ばにワーヘニンゲン農業大学（現ワーヘニンゲン大学）で立ち上げた地方史学科の研究者集団を指します。[1] 彼らは、ファン・バートの指導の下で、人口史と物価史を軸とした長期トレンドの解明と地方住民の職業構造の分析を通じて、近代初期オランダ農村部の発展を明らかにしていきました。一九六〇年に同学派の一員となったファン・デァ・ワウデは、七〇年代半ばからファン・バートに代わって同グループを率います。彼自身は、代表作『ノールダークワルティール *Het Noorderkwartier*』（一九七二年）において、一六世紀から一九世紀初めにおける同地域の人口や経済の歩みを詳細に分析しました。

もう一人の著者であるヤン・ド・フリースは、オランダ史のみならず『危機の時代のヨーロッパ経済 *The Economy of Europe in an Age of Crisis, 1600-1750*』（一九七六年）や、『ヨーロッパの都市化 *European Urbanization, 1500-1800*』（一九八七年）といった研究書を出版しているため、日本ではファン・デァ・ワウデより名の知られた歴史家でしょう。ちなみに彼はオランダ生まれですが、幼少期に家族とともに渡米して以来、一貫してアメリカの教育を受けた人物です。クレオメトリックスの洗礼を受けて以来、数量分析と新古典派理論を武器に近代初期研究の第一線で活躍しています。オランダ史の研究書では、『黄金期オランダの農村経済 一五〇〇～一七〇〇年 *The Dutch Rural Economy in the Golden Age, 1500-1700*』（一九七四年）の他、共和国期における曳舟交通の発展を追った『舟と資本主義――オランダ経済における旅客輸送 一六三二～一八三九年 *Barges and Capitalism; Passenger Transportation in the Dutch Economy (1632-1839)*』（一九七八年）があります。その他にも数々の論文を執筆し、オランダ共和国の近代性を一貫して問い続けてきました。それらの成果は、本書において存分に生かされています。

序文によれば、二人はファン・デァ・ワウデ邸の美しい裏庭に佇みながら本書の執筆を計画したとのことですが、歴史雑誌『歴史の鏡 *Spiegel historiael*』のインタビューから察するに、[2] おそらく一九八〇年頃のことでしょう。その後、仕事に取りかかったのは一九八三年一月だそうですから、執筆から出版までにざっと一二年間を要した計算になります。その間に本書は、本来予定していた概説書から、かくのごとく本格的な大作に変貌していくことになりました。以下に本書の特徴を三点ほど挙げてみましょう。

一つめの特徴は、アナール派的な構造主義アプローチとクレオメトリックスの組み合わせにあります。これは、ワーヘニン

ゲン学派の一員であるファン・デァ・ワウデが、ルシアン・フェーブルやフェルナン・ブローデルといったアナール派から大きな影響を受けていることと、ド・フリースがアメリカのニュー・エコノミック・ヒストリーを修めた学者であることを考えれば、当然の成り行きであったでしょう。包括的アプローチと緻密な数量的・理論的分析の融合は、叙述的なオランダ歴史学の伝統を払拭すべく、二人の碩学が長い時間をかけて実現した輝かしい到達点です。本書に関する書評や紹介は、わたくしが確認した範囲で一〇本を数えますが、[3] こうした方法論的な試みは総じて成功と受けとめられました。もっとも、批判がまったくないというわけではありません。本書にみられるアナール派的枠組みはオーソドックスなもので、戦争や革命といった短期の出来事を分析に取り込むことはできておりません。ド・フリースは、オランダ経済史の区切りとして政治的出来事を重視するジョナサン・イズレイルのスタイルに批判的ですが、本書がそれに代わる方法論を提示していない点はいささか残念です。[4]

二つめの特徴は、研究対象の広さと数量データの多さです。これらは一つめの方法論的特徴から必然的に生み出されるものですが、非常に徹底しています。オランダ各地の人口や物価動向、職業構造、富の分布といったワーヘニンゲン学派の実証的成果を総合したこと、工業や貿易といった充実した研究分野では多くの最新成果を踏まえて一つのイメージにまとめ上げたこと、金融・財政といった従来手薄な分野を新たな研究で補完したこと、さらに都市農村関係や労働市場、生活水準の分析を通じて、彼らは壮大かつ体系的な総合史を組み上げました。テーマ相互の関連づけや整合性の確保は難しかったに違いありません。同業者たちは、この点に関しても一様に賞賛の声を送っています。

三つめは、近代初期オランダ経済の近代性を強調する主張にあります。従来の議論の多くは、オランダ共和国経済が一八世紀に停滞し、工業化に至らなかった理由を同経済の前近代的本質に求めますが、著者はそうした解釈をとらず、マルサス的限界を超えた発展、前例のない高度な都市化、生産性を向上させた投資の大きさ、ヨーロッパで飛びぬけた一人当たりエネルギー消費、職業構造の多様化と分業の進展など様々な特徴を挙げることでオランダ経済の近代性を強調しました。ここまでは説得的な議論といえるでしょう。しかし、本書の最終的な結論は、専門家たちを当惑させるほど野心的な内容でした。それは、オランダ経済こそ史上初の「近代経済」であり、イギリスのそれは史上二番目にすぎないというものです。総じて高い評価を得た本書ではありますが、この結論には研究者の批判が集中しました。一八世紀に停滞し、産業革命も達成しなかった共和国がなぜ、史上初の「近代経済」なのでしょうか。そもそも「近代経済」とは何を意味するのでしょうか。

ファン・デァ・ワウデとド・フリースが提示する近代経済の重要条件は、以下の四点です。

・十分に自由で、かつ広まっていた物品・生産要素（土地、資本、労働力）の市場。
・広範囲な分業を可能にする複雑な社会・職業構造を支えた高い農業生産性。
・政策の決定と施行を通じて、財産権や、移動と契約の自由に気を配るとともに、ほとんどの住民の物質的生活状況に関心を持つ国家。
・持続的発展と、市場志向の消費行動を維持するに十分な多様性を持つ物質文化とを支えられるだけの技術的、組織的水準。

これらの条件は、史上初を唱えるには曖昧さが過ぎるようにみえます。その他のヨーロッパ各国に比べて、どれだけ優れていれば近代的といえるのかわからないからです。事実、中世後期の南部ネーデルラント研究で有名なファン・デァ・ウェー教授は、書評の中で、オランダに引けを取らない中世フランドル経済の「近代的」特徴をいくつも指摘しました。[5] 筆者たちは、条件を満たすことより、満たし方が重要なのだといいます。「一部のヨーロッパ社会が一時的にこれらの諸特徴をすべて有していたかもしれない」が、そうあり続けた社会はオランダ共和国が初めてだったというわけです。とはいえ、史上初を名乗るには、オランダの持続的な先進性を語るだけでは不十分でしょう。かつて繁栄したイタリア都市やアントウェルペン、あるいはイギリスとの比較が必要ですが、これは明らかに一国史の範囲を越えています。

ともあれ本書によれば、オランダは上記の条件を満たし続けた社会であるわけですが、一八世紀の「衰退」はどのように説明するのでしょうか。彼らはまたもや大胆な解釈を提示します。オランダ経済の衰退は「近代的」だったというのです。詭弁的に聞こえるかも知れません。彼ら自身「いささか強情かもしれない」とコメントしています。ともあれ、著者の主張はこうです。オランダ経済の衰退は、人口成長に生産力が追いつかないというマルサス的危機ではなかった。それは、オランダの衰退が中世的経済後退ではなかったことを意味している。オランダ人が直面した問題は、労働コストの上昇、不十分な（外国の）市場開放といった近代的な――まさに我々が直面しているような――経済問題であったというのです。特に生産コストの高止まりは、工業全体が直面した深刻な問題であり、結果的にオランダ経済は脱工業化に向かってしまいます。これは、その後工業が経済発展の牽引車となったことを考えると、致命的でした。ここで彼らは産業革命の失敗に触れているのですが、そう、その失敗は「近代的」理由によるものなのです。

持続的成長なき近代化という概念を受け入れるかどうかで、評価の内容が変わってくるわけですが、評者のほとんどはこれに反発しました。カーレル・ダヴィッツ（アムステルダム自由大学）は、「これ［史上初の近代経済であったこと］がホントならギネスに申請せねば」と茶々を入れつつ、この点を批判しました。[6] どう取り繕っても、オランダが長期的な経済成長に失敗

しているのは事実だというわけです。同様にファン・ザンデン（ユトレヒト大学・IISG：社会史国際研究所）も近代経済について言及し、持続的成長がみられなかったのだから、と本書の主張を否定しました。[7] 経済史家の間には「近代的経済成長とは、持続的、長期的なもの」という暗黙の了解があり、そこに批判の理由があります。

そもそも「史上初の近代経済」説は――その是非はともかくとして――結論で提言されるべき内容だったのでしょうか。本書で展開された詳細な実証的分析に基づく主張というより、むしろ今後の研究に向けた大胆な構想であるように思えます。なにしろ、同説には近代化や工業化に関する包括的な解釈やヨーロッパ規模の比較史的分析が必須であるにもかかわらず、本書はあくまで共和国史の枠組みを出ていないのですから。とはいえ、ファン・デァ・ワウデとド・フリースがこうした説を唱えるに至った動機には、オランダ史家として非常に共感できるものがあります。彼らが実証した通り、共和国経済は単なる経済史の一挿話を超える高度な発展を成し遂げました。しかも、オランダは「ヨーロッパの多くの地域で近代経済が確立する条件を整えた先導者」でした。近代初期は、ヨーロッパ諸国が経済大国オランダからの自立を目標に不可逆的発展を遂げていった時代です。そうした共和国の積極的役割を正当に評価すべきとの主張は、本書に限らず、以前から繰り返されてきたことです。

オランダの「近代性」を殊更に強調する姿勢は、近代世界を主な研究対象とするクレオメトリックスを共和国史研究に応用するというスタイルと深い関係があります。ド・フリースにとって共和国史は、近代初期ヨーロッパ史研究にクレオメトリックスが有効であることを示す何よりの事例であり、また、そうした手法を通じて共和国の積極的評価を可能としてきました。つまり、共和国史とクレオメトリックスは、互いの価値を証明し合う形を取ります。それゆえに「史上初の近代経済」論は、著者にとって一つの理想型なのです。彼らは、出版後の一九九七年に、西ヨーロッパの長期トレンドとオランダ「近代経済」の誕生について改めて説明しています。

共和国が近代国民経済へと発展した成長局面は、西ヨーロッパで一四七五年頃に始まり、（少なくとも北部ネーデルラントにとっては）二〇〇年近く続いた。この長期トレンドの拡大局面は、前半の一世紀間については、主として（アントウェルペンを中心に）南部ネーデルラントに重心があった。一六世紀第4四半世紀に発展の中心は、北部に――わかりやすくいえば、アントウェルペンからアムステルダムへと――移った。しかし、アムステルダムは（内部も、外部とのつながりをみても）アントウェルペンとは異なっていた。我々は、本の中でこの点を何度も強調しておいた。一四七五年頃に西ヨーロッパで始まった長期拡大期が一五八五年以後、北部ネーデルラントに「近代的」と呼ぶべき国民経済の誕生をもたらした。……伝統的な経済成長が同地の近代的経済成長に結実し

たのである。[8]

「史上初の近代経済」論の長所は、このようにオランダ史の枠組みを超えたスケールの大きさにあります。この議論は、オランダ史研究はもとより、近代初期の経済史的位置づけや、過去に繁栄を極めたヨーロッパ各地との比較を促してくれるからです。オランダ史学会の反応は意外と後ろ向きでしたが、共和国の再評価には外国人研究者が常に大きな役割を担ってきたことを考えると、それほど驚くべきことではないでしょう。わたくしは訳者の一人として、日本語版の出版がオランダおよび同国を取り巻くヨーロッパの経済史研究にとって新たな刺激となることを、大いに期待しています。

先述の通り、本書のオランダ語版と英語版は、いずれも著者が執筆したオリジナルです。英語版は、オランダ語版とほぼ同一の内容ですが、外国史を読者に理解してもらおうとする配慮と、若干の加筆がみられます。一方、オランダ語版は、一般教養人を念頭に執筆されているため、英語版より平易な文体で読みやすいという長所があります。日本語版は英語版を底本としましたが、英文の表現が日本語になじみにくい場合には、オランダ語版の文章を参照しています。翻訳に当たっては、原文に忠実であることを前提に、可能な限り日本語として違和感のない文章に移し変えるよう心がけたつもりです。

杉浦は、第2章から第4章と全図表の翻訳、固有名詞のカタカナ表記、著者との連絡、索引作成の他、全体の誤訳・文章チェックを担当しました。その結果、誤訳や誤記は大幅に減り、文章も読みやすくなりました。日本語版の質は、ひとえにこうした精力的な作業によって向上したといえます。大西は、杉浦による指摘・助言を受けつつ、残りの諸章を担当しました。その際、杉浦の担当部分にも手を入れて、文体や訳語の統一をはかっています。したがって、今後発見されるであろう翻訳に関するあらゆる問題は、もっぱら大西がその責任を負うべきものです。

作業にあたっては、多くの方々の協力を得ることができました。著者であるアド・ファン・デァ・ワウデ氏およびヤン・ド・フリース氏には、度重なる質問にもかかわらず、常に快く的確に対応してくださいました。両氏には、一流の学者がもつ「格」というものを教えていただいたように思います。固有名詞の発音に関しては、クレ・レスハー氏（アムステルダム大学）、ミヒァエル・セライス氏（レイデン大学）、ダニエレ・ファン・デン・ヘウフェル氏（ケンブリッジ大学）、マルコ・ファン・レーウエン氏（社会史国際研究所）、徳橋曜氏（富山大学）にご助力いただきました。訳者を代表して心より御礼申し上げます。また、名古屋大学出版会の橘宗吾氏は、遅々としてはかどらない作業を終始暖かい目で根気よく見守ってくださいました。長畑節子氏は、緻密な校正作業を通じて訳業を支えてくださいました。これらの方々に担当していただいたことは、本格的な翻訳とは無縁であったわたくしにとって、実に幸運だったと思います。ありがとうございました。

ファン・デァ・ワウデ先生は、二〇〇八年六月一四日に永眠されました。享年七五歳。前年五月に急逝されたフランシスカ夫人の後を追うかのような旅立ちでありました。ここに謹んで哀悼の意を表するものであります。わたくしにとって先生は、一九九二年の留学以来、公私にわたって教えを受けてきた恩師であり、今回の翻訳は先生に対するささやかな感謝のしるしとなるはずでした。しかし、悲しいかな翻訳作業は遅々として進まず、ついに間に合いませんでした。この一冊を、不肖の弟子から、今は亡きファン・デァ・ワウデ夫妻に捧げますことをお許しください。

二〇〇九年二月三日　富山にて

大西吉之